

杜甫「逸詩」札記

後藤秋正

はじめに

『杜詩詳注』卷二十三（以下、『詳注』）には杜甫の「逸詩」として次の五絶が収録されている。

三月雪連夜 三月 雪ふること連夜

未応傷物華 未だ応に物華を傷うべからず

只縁春欲尽 只だ春の尽きんと欲するに縁り

留著伴梨花 留著して梨花を伴う

『詳注』は杜甫の「逸詩」としているが、この詩が杜甫の詩であるかどうかは、はっきりしない。また『杜甫全集

校注』（人民文学出版社、二〇一四。以下、『校注』）卷二十二、鄭慶篤・張忠綱輯考「疑偽之作輯考」には、五律

「寒食夜、蘇二宅」が杜甫の作として収録されている。

寒食明堪坐 寒食 明らかにして坐するに堪う

春參夕已垂 春參 夕べに已に垂る

好風經柳葉 好風 柳葉を經

清月照花枝 清月 花枝を照らす

客淚聞歌掩 客淚 歌を聞いて掩い

歸心畏酒知 歸心 酒を畏れて知る

佳辰邀賞遍 佳辰 賞を邀むること遍し

忽忽更何為 忽忽として更に何をか為さん

『詳注』卷二十三にはこちらの詩は収録されない。便宜的に『詳注』所収の「逸詩」を（A）、『校注』所収の五律を（B）とし、両詩に用いられている詩語について考察を加え、両詩の性格について検討したい。

一

（A）について『校注』は、これを「闕題」として収め、以下のような按語を付している。この詩の出処はほぼこれに尽くされていよう。長くなるがそのまま引用する。

宋陳景沂《全芳備祖》前集卷九《花部》標為五言絕句、以為杜甫詩。明楊慎《丹鉛總錄》卷二〇《詩話類》・曹學佺《蜀中広記》卷一〇一《詩話記第一》・清仇兆鰲《杜詩詳注》卷二三・《全唐詩》卷二三四俱引《合璧事類》、以為杜甫逸詩。曹學佺《石倉歷代詩選》卷四五《盛唐十四》・明趙宦光・黃習遠編《万首唐人絕句》卷二《五言二》作杜甫詩、題《闕題》。《淵鑿類函》卷九《天部九・雪五》亦作杜甫詩、題作《春雪詩》。而宋蒲積中編《古今歲時雜詠》卷四三《三月》以為溫庭筠詩、題為《嘲三月十八日雪》。而宋洪邁編《万首唐人絕句》卷二一《五言》・清曾益《溫飛卿詩集箋注》卷九・《御選唐詩》卷二七《五言絕句》・《全唐詩》卷五八三《溫庭筠補遺》亦以為溫詩、詩題同《古今歲時雜詠》。清王士禛《唐人万首絕句選》卷二《五言二》亦作溫詩、題作《三月雪》。《佩文齋詠物詩選》卷一四《雪類》以為唐劉禹錫詩、題作《春雪》。

ここに挙げられる諸書のうち、前集二十七卷、後集三十一卷からなる『全芳備祖集』（花木果卉全芳備祖）とも）には、韓境の序があつて、「宝祐元年癸丑中秋、安陽老圃韓境序」というから、南宋・理宗の宝祐元年（一二五三）から遠くない時期に刊行されたものであろう。撰者の陳景

沂については『四庫全書總目』卷百三十五には、「号肥遯、天台人。仕履未詳（号は肥遯、天台の人。仕履は未詳）。」とあるが、これは嘉熙二年（一二三八）の進士、韓境の序を襲つたものであり、これ以外のことは不詳である。また『全芳備祖集』、『丹鉛總錄』、『蜀中広記』、『詳注』、『全唐詩』⁽²⁾が、いずれも（A）の典故としている『合璧事類』とは、南宋・謝維新編『古今合璧事類備要』を指す。前集六十九卷、後集八十一卷、続集五十六卷、別集九十四卷、外集六十六卷からなる類書であり、宝祐丁巳（一二五七）の成書である。ただし謝維新の経歴はほとんど不明であり、『古今合璧事類備要』の序に自署して、「膠痒進士、建安謝維新去咎父序。」というのみである。『四庫全書總目』は卷百三十五にこの書を収載する。これらのことから考えるならば、（A）は南宋の末期、杜甫没後、五百年近く経過してから初めて杜甫の詩として著録されるようになったといえよう。明・楊慎『升菴詩話』（歷代詩話統編）卷五、「杜逸詩」の条にはこの詩を引いて次のようにいう。

合璧事類載杜工部詩云、……此詩旧集不載。又、寒食少天氣、春風多柳花。又、小桃知客意、春尽始開花。則今之全集遺逸多矣。

合璧事類に杜工部の詩を載せて云う、……と。此の

詩 旧集には載せず。又、寒食 天氣少に、春風 柳花多しと。又、小桃 客意を知り、春尽きんとして始めて花開くと。則ち今の全集は遺逸多し。

ただし、温庭筠の作とする蒲積中編『古今歳時雜詠』には紹興丁卯（紹興一七年、一一四七）の紀年を有する自序があるから、彼の作とする見解も南宋の初期には存在したことになる。『佩文齋詠物詩選』は康熙四十五年（一七八〇）に完成しているので、劉禹錫の作とする見解はこれよりかなり遅れて提出されたものである。この書は出処を示さないで、何に拠ったかは不明である。

佟培基編撰『全唐詩重出誤収考』（陝西人民教育出版社、一九九六）の指摘も見ておこう。

闕題、又作温庭筠（題作「嘲三月十八日雪」、「雜詠」四三列温飛卿「三月十八日雪中作」詩後、題下佚名。清人曾益『温飛卿集箋注』列作集外詩。而諸種杜集亦不載此詩、趙宦光「絶句」二作杜。「統籤」二一「二一〇の誤り」『丙籤』六〇杜甫集末載此首、下注、「見合璧事類」。当為「古今合璧事類備要」、宋謝維新所編之類書。詩之歸屬尚難定。

『全唐詩重出誤収考』は劉禹錫の作とする『佩文齋詠物詩選』には言及しないが、杜甫の詩であるか温庭筠の詩で

あるかに限ってみても、誰に帰属させるかについては定めたいとするのは妥当であろう。

二

康熙五十二年（一七一三）の勅撰になる『御選唐詩』巻二十七が（A）に注を付している。

〔起句〕丘遲書、暮春三月草長。皇甫冉詩、春雪偏当夜、暄風却變寒。宋之問詩、歌舞宜連夜。

〔承句〕沈約詩、留人未応去。王筠詩、物華方入賞。陽縉詩、青門小苑物華新。

〔軋句〕孟浩然詩、林臥愁春尽、開軒攬物華。庾信詩、夏余花欲尽。

〔結句〕庾信詩、留雪擬彈琴。王融池上梨花詩、当春照流雪。

『御選唐詩』は温庭筠「嘲三月十八日雪」として収録するが、これを手懸かりとしながら、若干の補足を試みよう。起句から確認しよう。「三月」の語は頻出するので、それが適切な出典であるかは定められない。「丘遲書」は、「与陳伯之書」（『梁書』巻二〇、「陳伯之伝」）であり、「暮春三月江南草長、雜花生樹群鳥亂飛（暮春 三月 江南草長じ、雜花 樹に生じて群鳥 乱れ飛ぶ）」とある。杜

詩では「即事」(『詳注』巻一八)に、

暮春三月巫峽長 暮春 三月 巫峽長し

晶晶行雲浮日光 晶晶たる行雲 日光に泛かぶ

とある。「雪連夜」について、『御選唐詩』は、皇甫冉「奉

和对雪」(『全唐詩』巻二〇〇)から、「春雪偏当夜、暄風

却變寒(春雪 偏に夜に当たり、暄風 却って寒きを變

ず)」の句と宋之問の詩を引くが、宋之問の「広州朱長史

座觀妓」(『全唐詩』巻五三)には、「歌舞須連夜、神仙莫

放歸(歌舞 須く夜に連なるべし、神仙 放ち帰ること莫

かれ)」とあつて、引用とは異同がある。ただし、「雪」と

「連」とが結びついた例ならば、このように二人の作に分

割した用例を引かなくとも、杜詩には、これは馬の毛艶を

喩えたものだが、「瘦馬行」(『詳注』巻六)に、

皮乾剥落雜泥滓 皮乾きて剥落 泥滓雜わり

毛暗蕭條連雪霜 毛暗くして蕭條 雪霜連なる

という例がある。杜詩には「連夜」の用例は見られない。

承句はどうであらうか。「未応」の典故として引かれる

沈約の詩とは「甌庭柳詩」(遼欽立『梁詩』巻七、『玉台新

詠』巻五は「詠柳」に作る。以下、遼欽立を省略)であり、

「遊人未応去、為此還故郷(遊人 未だ応に去るべからず、

此れが為に故郷に還らん)」とある。杜詩にも用例があり、

「三絶句」(其一)(『詳注』巻一一)に、

楸樹馨香倚釣磯 楸樹 馨香ありて釣磯に倚る

斬新花藥未応飛 斬新の花藥 未だ応に飛ぶべからず

とあり、「題衡山景文宣王廟新学堂、呈陸宰」(『詳注』巻

二三)には、

周室宜中興 周室 宜しく中興すべし

孔門未応棄 孔門 未だ応に棄つべからず

という。「物華」について『御選唐詩』は王筠「望夕霽

詩」(『梁詩』巻二四)から、「物華方入賞、跂予心期会

(物華 方に賞に入り、跂ちて予心に会するを期す)」の句

と陽縉「俠客控絶影詩」(『陳詩』巻六)から、「青門小苑

物華新、花開鳥弄会芳春(青門の小苑 物華新たに、花開

き鳥弄して芳春に会す)」の句を引く。「物華」の語は梁代

頃から詩に用いられ始めたらしく、王僧孺「至牛渚、憶魏

少英詩」(『梁詩』巻一二)にも用例がある。ただし「傷物

華」という表現は(A)にしか見られない表現である。

転句を見る。「春欲尽」の典故として、『御選唐詩』は、

孟浩然「清明日宴梅道士」(『全唐詩』巻一六〇)から、

「林臥愁春尽、開軒覽物華(林に臥して春の尽きんとする

を愁え、軒を開きて物華を覽る)」の句を引く。しかし

「春欲尽」という表現は、崔国輔「奉和聖製上巳祓禊、応

制」(『全唐詩』卷一九)に、「魚竜百戯浮、桃花春欲尽(魚竜 百戯浮かび、桃花 春尽きんと欲す)」と見え、杜詩にも「絶句漫興九首」(其五)(『詳注』卷九)に、

腸断江春欲尽頭 腸は断ゆ江春 尽きんと欲する頭
杖藜徐歩立芳洲 藜を杖き徐ろに歩みて芳洲に立つ

とあるほか、「官池春雁、二首」(其二)(『詳注』卷一二)にも用例がある。「庾信詩」とは、「入彭城館詩」(『北周詩』卷二)であり、「夏余花欲尽、秋近燕将稀(夏余 花は尽きんと欲し、秋近くして燕は將に稀ならんとす)」の句がある。

『御選唐詩』は「只縁」(祇縁)の出典を示さないが、劉長卿「小鳥篇、上裴尹」(『全唐詩』卷一五一)に、「只縁六翻不自致、長似孤雲無所依(只だ六翻の自ら致さざるに縁り、長く孤雲の依る所無きに似たり)」とあり、杜詩にも「又呈吳郎」(『詳注』卷二〇)に、

不為困窮寧有此 困窮の為ならずんば寧ぞ此れ有らん
祇縁恐懼轉須親 祇だ恐懼するに縁りて転た須く親し

と見えている。

結句はどうか。『御選唐詩』は「留著」の出典として庾

むべし

信「詠春近余雪、応詔」(『北周詩』卷四)から、「待花将对酒、留雪擬弹琴(花を待ちて將に酒に対わんとし、雪を留めて琴を弾かんと擬)」の句を引く。これを引いたのは「着」「留」と「雪」の関連に着目したためであろう。しかし「留著(着)」の語は、それほど稀見の語ではない。唐代以前の用例は見られないようだが、杜審言「代張侍御傷美人」(『全唐詩』卷六二)に、「応憐脂粉氣、留著舞衣中(応に憐れむべし脂粉の氣の、舞衣の中に留著するを)」と見え、李白「宮中行樂詞、八首」(其四)(『全唐詩』卷一六四)にも、「莫教明月去、留著醉嫦娥(明月をして去らしむる莫かれ、留著して嫦娥を酔わしめん)」とある。また『御選唐詩』が王融「詠池上梨花詩」(『齊詩』卷二)から、「芳春照流雪、深夕映繁星(芳春 流雪に照り、深夕 繁星に映ず)」の句を引いているのは、これが「梨花」と「雪」を詠じているためであろう。王融のこの詩に和した劉綰「和池上梨花詩」(『齊詩』卷五)もある。「梨花」が詩に詠じられるのは南齊期に始まったらしい。唐代に入ると用例はさらに増え、李白の詩の例を挙げると、「宮中行樂詞、八首」(其二)(同前)に、梨の花を白雪に喩えて詠じた、「柳色黃金嫩、梨花白雪香(柳色 黃金嫩らかに、梨花 白雪香る)」の句が見える。この句などが(A)

の発想の源泉になつてゐるかも知れない。「梨花」は杜詩にも一例があり、「曲江对酒」(『詳注』巻六)に次のようにある。

桃花細逐梨花落 桃花 細かに梨花を逐いて落ち
黄鳥時兼白鳥飛 黄鳥 時に白鳥と兼に飛ぶ

三

次に(B)の典故と詩題について確認しておこう。

『校注』はこの詩に、以下のような按語を付している。

この詩の出処についての検討はほぼこれに尽きていよう。これも長くなるがそのまま引用する。

按、此拋宋蒲積中編《古今歲時雜詠》卷一一《寒食上》所載、題為杜甫詩。陳尚君於《全唐詩補編・続拾》卷一五按云、「《古今歲時雜詠》各類詩均分為古詩・今詩二部分、古詩為宋綬《歲時雜詠》原編、今詩始為蒲積中所輯。宋綬為宋敏求之父、卒於慶曆初。其時王洙本《杜工部集》雖已編成、尚未刊佈。⁽⁴⁾宋綬所撰材料、有為王洙未及見者。《古今歲時雜詠》在宋明二代流布未広、故治杜詩者多未見之。此詩各本《杜集》皆失収。今亟錄出、以供治杜者研究。」

確かに『歲時雜詠』には五律「寒食」(『詳注』巻二〇)、

五律「一百五日夜、对月」(『詳注』巻四)とともにこの詩が収められており、陳尚君はこの詩が十分に考察の対象になると考えているようである。

詩題に見える「蘇二」については、陳冠明・孫憐婷撰『杜甫親眷交遊行年考』(上海古籍出版社、二〇〇六)に以下のような考証があり、「季秋、蘇五弟纓、江樓夜宴崔十三評事韋少府姪、三首」(『詳注』巻二〇)と「戲寄崔評事表姪蘇五表弟韋大少府諸姪」(同上)との関連を考慮して、大曆二年(七六七)ころ、夔州(重慶市奉節県)で書かれ、蘇二は蘇五である可能性があることを指摘している。

蘇二 名未詳。《全唐詩統拾遺》卷十五拋《古今歲時雜詠》卷十一補錄杜甫《寒食夜蘇二宅》詩。此詩未知作於何時何地。按、杜甫有表弟蘇五纓。大曆二年(七六七)、杜甫在夔州、有《季秋蘇五弟纓江樓夜宴崔十三評事韋少府姪三首》・《戲寄崔評事表姪蘇五表弟韋大少府諸姪》詩。而此詩云、「客淚聞歌掩、帰心畏酒知。」似在其間。蘇二或為蘇五之訛、亦未可知。

それでは首聯から検討してみよう。「寒食」の語は頻出するが、これが詩に用いられるのは何遜「与崔録事別、兼敘携手」(『梁詩』巻八)に見える、「復道中寒食、弥留曠不平(復た道う寒食に中ると、弥しく留まり曠として平ら

かならず」という句などが早いものであろう。

「堪坐」という表現自体は唐代以前には見えず、唐詩において「那〔何〕堪……」などと反語を示す形で見える。「堪」と「坐」が関連して用いられる例としては、張易之「出塞」(『全唐詩』卷八〇)に、「誰堪坐秋思、羅袖抃空牀(誰か堪えん坐して秋思するに、羅袖 空牀を抃う)」の句がある。また王維「李陵詠」(『全唐詩』卷一二五)には、「少小蒙漢恩、何堪坐思此(少小より漢恩を蒙る、何ぞ堪えん此に坐思するを)」といい、さらに李白「春日独坐、寄鄭明府」(『全唐詩』卷一七二)にも用例がある。「春參」は、春の夜空に懸かるオリオン座の三つ星だが、少なくとも宋代以前に用例は見出せず、「夕已垂」と完全に重なる用例も見出せない。「已垂」は、沈約「詠簷前竹詩」(『梁詩』卷七)に、「萌開籜已垂、結葉始成枝(萌開きて籜已に垂れ、葉を結びて始めて枝を成す)」とあり、虞羲「数名詩」(『梁詩』卷五)に、「二毛颯已垂、家貧無所抃(二毛 颯として已に垂れ、家貧しくして抃ぶ所無し)」などとあって、竹の子の皮や毛髪が垂れることに用いられる。天体についていうのは、例えば「星垂」を例にとると、杜甫から始まるのではなからうか。「旅夜書懷」(『詳注』卷一四)には、よく知られた次の句がある。

星垂平野闊 星垂れて平野闊く

月湧大江流 月湧いて大江流る

また錢起「過王舍人宅」(『全唐詩』卷二三八)の、「彩筆有新詠、文星垂太虚(彩筆 新詠有り、文星 太虚に垂る)」という例は、『易』繫辭伝上に見える「天垂象見吉凶、聖人象之(天は象を垂れ吉凶を見し、聖人は之に象る)。」を踏まえている。杜詩の用例と類似するものを挙げておけば、楊凝「夜泊渭津」(『全唐詩』卷二九〇)に、「遠処星垂岸、中流月滿船(遠処 星は岸に垂れ、中流 月は船に滿つ)」とあり、李頻「送友人往振武」(『全唐詩』卷五八七)に、「磧夜星垂地、雲明火上樓(磧夜 星は地に垂れ、雲明 火は樓に上る)」とある。この二篇は杜詩に学んだものかも知れない。

ついで領聯を見よう。「好風」は陶淵明「讀山海經詩、十三首」(其一)(『晋詩』卷一七)に、「微雨從東來、好風与之俱(微雨 東より來り、好風 之と俱にす)」とあるのが早いものであろう。唐代に入っても用例は多いが、杜審言「大酺」(『全唐詩』卷六二)には、「梅花落処疑殘雪、柳葉開時任好風(梅花落つる処 殘雪かと疑う、柳葉 開く時 好風に任さん)」という句がある。これにも「柳葉」と「好風」とが詠じられていることが留意される。こ

の語は李白「杭州送裴大沢、時赴廬州長史」(『全唐詩』卷一七六)にも「好風吹落日、流水引長吟(好風 落日を吹き、流水 長吟を引く)」と見えている。ただし、「好風」の語は杜詩には見られない。「清月」はどうであろうか。

最も早いのは、王融「清楚引」(『齊詩』卷二)に見える「清月罔将曙、浩露零中宵(清月 罔らかにして将に曙けんとし、浩露 中宵に零つ)」という例だろう。唐代に入ると崔湜「唐都尉山池」(『全唐詩』卷五四)に、「幽尋惜未已、清月半西楼(幽尋 未だ已まざるを惜しむ、清月 西楼に半ばなり)」とあり、杜甫「宴王使君宅題、二首」(其二)「詳注」卷二二)にも、

江湖墮清月 江湖 清月墮つ

酩酊任扶還 酩酊して扶還に任さん

と、一例が見えている。「花枝」は、謝朓「与江水曹至干浜戲詩」(『齊詩』卷四)に見える、「花枝聚如雪、蕪糸散猶網(花枝 聚まりて雪の如く、蕪糸 散じて猶お網のごとし)」という例が早いものだろう。唐詩では元稹「仁風李著作園、醉後寄李十」(『全唐詩』卷四二二)に、「照花枝」という形で用例もある。「朧明春月照花枝、花下音声是管兒(朧明の春月 花枝を照らし、花下の音声 是れ管兒)」とあるのがそれである。「朧明」は、月光がうすば

んやりと射しこむさま。「管兒」は、笛。また、崔道融「長門怨」(『全唐詩』卷七二四)にも、「長門春欲尽、明月照花枝(長門 春尽きんと欲し、明月 花枝を照らす)」という句がある。杜甫「酬郭十五判官」(『詳注』卷二二)には、

葉裏関心詩総廃 葉裏 関心 詩総て廃するに

花枝照眼句還成 花枝 眼を照らして句還た成る

とあり、『詳注』は梁・武帝「春歌」の「階上香入懷、庭中花照眼(階上 香り懷に入り、庭中 花 眼を照らす)」の句を典拠として引く。

ついで頸聯を見よう。「客涙」は、杜詩には「過客涙」も含めると四例が見られる。そのうち「九成宮」(『詳注』卷五)には、

哀猿啼一声 哀猿 啼くこと一声

客淚迸林藪 客淚 林藪に迸る

の句があり、『詳注』は劉珊「賦得馬詩」(『陳詩』卷六)から「辺声隕客淚(辺声 客淚隕つ)」の句を引いている。しかし、用例としては謝朓「同詠樂器・琴」(『齊詩』卷四)に見える「是時練別鶴、淫淫客淚垂(是の時 別鶴を練れば、淫淫として客淚垂る)」の句が早いものである。杜詩の、他の二例は次の通りである。

天風随断柳 天風 断柳に随い
客淚墮清筍 客淚 清筍に墮つ

〔遣懷〕〔詳注〕卷七)

祗応尽客淚 祗だ^た応に客淚を尽くして
復作掩荆扉 復た荆扉を掩^{おほ}うことを作すべし

〔贈韋贇善別〕〔詳注〕卷一一)

後者には「客淚」以外に「掩」も見られる。「聞歌掩」という表現そのものの用例は見られないが、「掩歌扇」、「掩歌臂」といった表現は杜甫以前にも散見する。また「聞歌」に似た表現はしばしば見られる。ただし杜詩においては「征夫」〔詳注〕卷一一)に、

路衝唯見哭 路衝 唯だ哭するを見

城市不聞歌 城市 歌を聞かず

という、否定形で用いられる例が見えるのみである。「帰心」、故郷へ帰りたいという願い、はどうであろうか。この語の用例は多い。早いものは王讚「雜詩」〔『文選』卷二九、〔晋詩〕卷八)に、「朔風動秋草、辺馬有帰心(朔風秋草を動かし、辺馬 帰心有り)」と見える。唐詩においても盧照鄰「九月九日、登玄武山」〔『全唐詩』卷四二)に、「九月九日眺山川、帰心帰望積風塵(九月九日 山川を眺む、帰心 帰望 風塵積む)」とあり、李白「寄東魯二稚

子」〔『全唐詩』卷一七二)にも用例があつて、杜詩には「長江、二首」(其一)〔詳注〕卷一四)などに三例が見える。ここは「上後園山脚」〔詳注〕卷一九)を引いておこう。

時危無消息 時危うくして消息無し

老去多帰心 老い去りて帰心多し

「帰心畏酒知」の句の「畏酒知」については全く類例を見ない。「畏酒」については、蘇軾「叔弼云、履常不飲故不作詩、勸履常飲」〔『東坡全集』卷一九)に、「我本畏酒人、臨觴未嘗訴(我本と酒を畏るる人、觴に臨んで未だ嘗て訴えず)」とあり、陸游「病酒宿土坊駅」〔『劍南詩稿』卷一三)に、「少時見酒喜欲舞、老大畏酒如畏虎(少時酒を見て喜びて舞わんと欲す、老大 酒を畏ること虎を畏るるが如し)」と、宋代の例がある。

最後に尾聯を見よう。「佳辰(嘉辰)」は唐代以前の用例として、賦では応場「西狩賦」〔『芸文類聚』卷六六)に、「既乃練吉日、練嘉辰(既に乃ち吉日を練び、嘉辰を練ぶ)」とあり、詩では王筠「五日、望採拾詩」〔『梁詩』卷二四)に、「長糸表良節、金縷応嘉辰(長糸 良節を表し、金縷 嘉辰に応ず)」とあるのを早い例として唐詩にも多い。杜詩の二例を引いておこう。

佳辰対群盜 佳辰 群盜に対す

愁絶更堪論 愁絶 更に論ずるに堪えんや

「九日、五首」〈其四〉〔詳注〕卷二〇〕

佳辰強飲食猶寒 佳辰 強いて飲めば食猶お寒し

隱几蕭條戴鶻冠 几に隠り蕭條として鶻冠を戴く

「小寒食、舟中作」〔詳注〕卷二三〕

これを見る限りでは杜甫は「佳辰」を心底から楽しむことができてはいない。「邀賞」はどうか。『漢語大詞典』では、「求取賞賜。」として、『資治通鑑』唐・高祖武徳九年（六二六）の記事を引いている。この語が詩に用いられるのは、元・馬祖常（二二七九―一三三八）の「吳宗師送牡丹」〔元詩選〕初集・丙集『石田集』に、「十五年前花発時、仙翁邀賞醉瑤池（十五年前 花発きし時、仙翁 賞を邀めて瑤池に酔う）」とあるのが最初ではないか。「忽忽」は、多様な意味を有する語であるが、既に『楚辞』「離騷」〔文選〕卷三二〕に、時の速やかな経過を表す語として、「欲少留此靈瑣兮、日忽忽其將暮（少く此の靈瑣に留まらんと欲するに、日は忽忽として其れ將に暮れんとす）」と用いられており、杜詩には二例が見えている。

忽忽峡中睡 忽忽として峡中に睡る

悲風方一醒 悲風に方一たび醒む

「奉酬薛十二丈判官見贈」〔詳注〕卷一九〕

年年至日長為客 年年 至日 長に客と為る

忽忽窮愁泥殺人 忽忽として窮愁 人を泥殺す

「冬至」〔詳注〕卷二一〕

『詳注』は後者について阮籍「詠懷詩、八十二首」〈其十八〉〔魏詩〕卷一〇〕から、「流光耀四海、忽忽夕冥」〔流光 四海に耀き、忽忽として夕冥に至る〕の句を引き、さらに「測旨」を引いて、「忽忽、不定也（忽忽は、定まらざるなり）」と言う。（B）と杜詩においては、心がぼんやりするさまを言うのであろう。

「更何為」は、これ以上なにもすることはない、の意。

詩においては唐代以前には見えない表現であり、唐詩では徐鉉「和蕭郎中平日見寄」〔全唐詩〕卷七五四、「宋詩鈔」卷二「騎省集鈔」に、「細雨輕風采葉時、褰簾隱几更何為（細雨 輕風 葉を采る時、簾を褰げ几に隠りて更に何をか為さん）」という句があり、貫休「思匡山賈臣」〔全唐詩〕卷八二九、「唐詩紀事」卷七五）にも、「山兄詩癖甚、寒夜更何為（山兄 詩癖甚だし、寒夜 更に何をか為さん）」という用例が見られる。

四

『歳時雜詠』には杜詩が五十篇収録されている。その中には以下のような詩が含まれる。

卷十一 「寒食夜、蘇二宅」、「寒食行」

卷三十四 「九日、陪淳侍中宴白樓」、「九日、奉陪侍中宴後亭」、「九日、奉陪令公登白樓、同詠菊」、「九日、同司直九雀侍御登宝鷄南樓」、「和趙端公九日登石亭、上和州家兄」

卷四十三 「慈恩寺二月半、寓言一首」、「三月閨怨」

ここに挙げた詩を『歳時雜詠』はすべて杜甫の詩と見なしているが、実はこれらは杜甫の詩ではない。「寒食行」(『全唐詩』卷二九八)は王建の作である。「九日、陪淳侍中宴白樓」は「九日、奉陪侍中宴白樓」(『全唐詩』卷二七九)であって、盧綸の作であり、以下、「九日、奉陪侍中宴後亭」(『全唐詩』卷二七九)、「九日、奉陪令公登白樓、同詠菊」(同前)、「九日、同司直九雀侍御登宝鷄南樓」(同前)、「和趙端公九日登石亭、上和州家兄」(『全唐詩』卷二七七)もすべて盧綸の作である。また、「慈恩寺二月半、寓言一首」は蘇頌の詩であって、『文苑英華』卷二百三十三と『全唐詩』卷七十四に収められる。「三月閨怨」は張

説の「春閨怨⁽¹⁴⁾」であって『全唐詩』卷八十九に収められるつまり『歳時雜詠』が杜甫の作として引いている詩のうち前掲の七篇は、王建と盧綸と蘇頌の詩なのである。冒頭に引いた『校注』は、『古今歳時雜詠』在宋明二代流布未広故治杜詩者多未見之。此詩各本《杜集》皆失収。」と述べていたが、『歳時雜詠』の編纂にはかなり杜撰な部分があることを認めざるを得ないのである。従って『歳時雜詠』卷十一に収録される七篇のうち、「寒食行」を除く六篇に限ってみても、の中には他者の作が混入している可能性がある。

おわりに

以上に述べてきたことをまとめておくならば以下のようなろう。

(A)の詩から、特定の詩を下敷きにした痕跡はうかがえない。出典から考えるならば南朝時代の詩を意識することが多いようであり、結句に限って見れば、李白の詩を意識しているように見受けられる。ただし、「梨花」の白さを雪の白さに喩えることは南朝時代からしばしば見られた発想であり、取り立てて新鮮味があるとは言えない。

杜甫は詩語の選択と彫琢に心血を注いだ。伝統的な詩語

に新たな価値を見出したばかりでなく、時には新たな詩語の開拓・発見に至るほど精力を傾注したのである。⁽¹⁶⁾ そういった点からするとこの詩は明らかに様相を異にする。したがってこの詩が仮に杜甫のものであったとしても、杜詩の評価について何らかの新見を付加するものとはならないであらう。

(B) はどうか。先に見てきたように、(B) には特定の作者や作品に依拠する傾向は見出せない。その中で注目されるのは、「邀賢」、及び「更何為」という表現である。こうした表現は晩唐以前には見出せなかつた。このことは、この詩が誰の作なのかは特定できないにしても、『歳時雜詠』が南宋・紹興十七年(一一四七)の蒲積中の自序を有することから考えて、晩唐以降、南宋以前の作者の手になつたことを示唆しているのではなからうか。『歳時雜詠』だけが(B)を杜甫の詩として収録することには大きな疑問が残ると言わざるを得ない。

先に引いた『校注』は『歳時雜詠』の流布は限られていたというが、少なくとも朱翌(一〇九八〜一一六七)の『猗覺寮雜記』巻上、王応麟(一一二三〜一二九六)の『玉海』巻十二、王士禛(一六三四〜一七二一)の『居易録』巻十二には『歳時雜詠』からの引用、もしくは言及が

ある。つまり、一部の識者にはこの詩の存在は知られていたのである。それでもなおこの詩が他の書物に収録されなかつたのは、この詩が偽作であると考えられていた証左ではなからうか。

注

(1) 王大淳『丹鉛總錄箋證』(浙江古籍出版社、二〇一三)、「杜逸詩」には、以下のような指摘がある。

「三月雪連夜」一首、除《合璧事類》外、宋陳景沂《全芳備祖集前集》卷九・《石倉歷代詩選》卷四十五亦作杜詩。然拋宋蒲積中《歳時雜詠》卷四十三・洪邁《万首唐人絶句》五言卷二十一則作温庭筠詩、詩題《嘲三月十八日雪》、亦收入《温飛卿詩集》、疑非杜作。又《御定佩文齋詠物詩選》卷十四題作劉禹錫詩、詩題題《春雪》。未知何拠。

(2) 『全唐詩』卷二三四には杜甫「關題」として収め、「右一首及下逸句、見合璧事類。」と言うが、温庭筠「嘲三月十八日雪」として収める卷五八三に注はない。

(3) 李白「送別」(『全唐詩』卷一七七)には、「梨花千樹雪、楊葉万條煙(梨花 千樹の雪、楊葉 万條の煙)」の句があるが、これと全く同じ句が、『全唐詩』卷二〇〇に収録される岑参「送楊子」にも見える。これが岑参の詩であることについては、森野繁夫・進藤多万『岑嘉州集』(白帝社、二〇〇八)が指摘するとおり、嚴羽『滄浪詩話』「考證」に指摘されており、同

様の指摘は魏慶之『詩人玉屑』巻一一、「考證」の項にも見えている。

(4) 陳尚君輯校『全唐詩統拾』(中華書局、一九九二)巻一五は「佈」を「布」に作る。

(5) ただし、『詳注』所収の詩とは異同があり、「汀烟」を「江烟」に、「問不違」を「行不違」に作る。

(6) 同題で八句多い詩が『全唐詩』巻九九では張柬之の作とされ、佟培基『全唐詩重出誤収考』(陝西人民教育出版社、一九九六)は、張柬之の作と推定している。

(7) 「蕪糸」を『芸文類聚』巻二九は「垂藤」に作る。

(8) 『全唐詩』に、「音」は一に「鶯」に作り、「是」は一に「似」に作るという。

(9) 「題忠州竜興寺所居院壁」(『詳注』巻一四)に、「空看過客淚、莫覓主人恩(空しく看る過客の涙、覓むる莫かれ主人の恩)」とある。

(10) 『資治通鑑』巻一九一、唐紀卷七、武徳九年七月の条に、「太子建成・齊王元吉之党、散亡在民間、雖更赦令、猶不自安、微幸者爭告捕以邀賞(太子建成・齊王元吉の党、散亡して民間に在り、赦令を更むと雖も、猶お自ずから安んぜず、幸いを徴むる者は争い告げ捕えて以て賞を邀めんとす)」とある。

(11) 『詳注』は「夕冥」を「夕窮」に作る。

(12) 「則旨(測旨)」は明・趙大綱撰。『詳注』には三箇所に引用されている。

(13) このほか姚合「題鳳翔西郭新亭」(『全唐詩』巻四九九)に

も例があるが、『全唐詩』の注に、「更何」は「一作信虚」とあるので除外した。

(14) 『唐詩紀事』巻二三は袁暉の作とする。

(15) 張忠綱主編『杜甫大辞典』(山東教育出版社、二〇〇九)

「作品提要・附録」にも「校注」と全く同文の指摘がある。

(16) 拙著『東西南北の人―杜甫の詩と詩話』(研文出版、二〇一

一)、同『杜甫詩話―何れの日か是れ帰年ならん』(同、二〇

一二)、同『花燃えんと欲す―続・杜甫詩話』(同、二〇一

四)などを参照。

〔補遺〕

『詳注』巻二三「逸詩」には、「秋雨吟」と題する、「屋小茅乾雨声大、自疑身着蓑衣臥(屋小に茅乾きて雨声大なり、自ら疑う身に蓑衣を着けて臥するを)」で始まる七言八句の詩を載せて、祝穆撰「事文類聚」前集巻五に見えるという。そこに杜甫の「雨夜吟」として載せられるこの詩が陸龜蒙の作であることは確実であり、陸龜蒙『甫里集』巻一七、及び『全唐詩』巻六二二には「雨夜」、「文苑英華」巻三三二には「雨夜吟」として収められている。仇兆鰲の誤認である。

(北海道教育大学)